

令和3年度第2回沿岸地域振興圏地域連携懇談会 開催概要

1 日時 令和3年12月6日（月）14時～15時40分

2 場所 釜石地区合同庁舎4階 大会議室

3 参集者

- (1) 赤坂広太委員、内金崎加代子委員、河野通洋委員、佐々木淳子委員、佐々木康行委員、佐藤智子委員、椎屋百代委員、橋本美紀委員、山元一輝委員
- (2) 沿岸広域振興局長、副局長、副局長（宮古市駐在）、副局長（大船渡市駐在）、経営企画部長兼復興推進室長、保健福祉環境部長、農林部長、水産部長、土木部長、経営企画部産業振興室長、経営企画部特命参事兼企画推進課長（事務局）

4 概要

○ 局長挨拶

皆様におかれましては、年末のお忙しい中、懇談会に出席いただき、感謝申し上げます。

今回は、令和2年度の沿岸広域振興局の施策について御意見をいただき、その意見に基づき今年度は、様々な施策を行ってきた。

振興局では、新型コロナウイルス感染症の影響により、昨年来、多くの事業の中止・縮小を余儀なくされたところであり、「オミクロン株」による感染拡大も心配されているところではあるが、全国的な感染状況は落ち着いており、今後の経済の回復を期待している。

本日の懇談会では、来年度の振興局における施策の展開方向の案等についてご説明し、実際に地域で活躍されている皆様から、ご意見をいただき、より効果的な施策につなげていきたいと考えているので、よろしくご意見申し上げます。

(1) 令和3年度 第1回沿岸広域振興圏地域連携懇談会における御意見に対する対応状況について

事務局から資料No.1に沿って説明。

(2) 令和2年度 沿岸広域振興圏 施策評価について

事務局から資料No.2に沿って説明。

(3) 令和4年度 沿岸広域振興局 施策展開方向について

事務局から資料No.3、資料No.3-1、資料No.3-2に沿って説明。

【河野 通洋 委員】

水産加工に関して、水産加工メーカーに、しょうゆ・みそ・たれを納めているが、非常に危機感を感じている。出荷量は震災前と比較すると鮭は約20分の1だが、イクラにおいては放流分を確保する必要があるため約500分の1となっている。加工用の醤油は、震災前約200トン出荷していたが、昨年は約3トン、今年は約1トンを切るくらいまで荷数が落ち込んでいる。

加えて、サンマ、イワシ、イカが今年は取れない。イワシは、取れているが、型が小さくて、加工に回せず、頼みの綱のサバも11月から北海道沖からの魚群が見えない状況である。

原料を調達できない中で、高付加価値を狙うことが必須であるが、事務局から説明があったトラウトサーモンの養殖では、追いつかないくらい、原料が枯渇しており、回復の見込がないと考えている。

別次元の産業のシフトチェンジが必要であり、三陸の強みを活かした加工品を作ることや、ここでしか食べられないという仕組みを作るなど、高付加価値化を狙う必要があると考えている。

⇒ **【局長】**

漁業においては魚が獲れないことに加え、獲れてもいつまで続くかわからないという状況である。中小企業基盤整備機構の力を借りて、どういう戦略でいくか、どう加工するか、専門家からアドバイスをいただき、水産加工業を支援していくことも一つの手であると考えている。また、新しい加工商品により交流人口を引っ張ってきて、お金を落としてもらうことを考えている。サーモンに限らず、陸上養殖が新たに始まっており、震災跡地という資源もあるので、そういった資源の有効活用も支援していきたい。

【佐々木 淳子 委員】

6次産業化ということで県及び市の支援をいただきながら、ワカメの芯を使った佃煮や、アカモクのふりかけの製作に取り組んでおり、あと少しで商品化できるところまできている。八木澤商店のような事業主ではないので、儲けを追求しているわけではないが、アカモクは、健康に良い栄養素（血圧を下げるカリウム）が多く含まれていることで有名である。岩手県は、脳血管障害が全国ワーストで、その中でも釜石市は死亡率が1位か2位と言われている。アカモクを是非普及させて、釜石のみならず県内に広めたいと思っている。これからも是非県の御支援を頂戴したい。

⇒ **【局長】**

振興局としても、地域の眠っている資源を多くの人達に知ってもらうために、今年度の事業として、QRコードを利用して地域資源を知ってもらうという取り組みをしている。

地元で眠る資源を活用することは、地域振興の大きな力になるので、多くの方に来ていただくことにより収入が増え、地域振興にも繋がると考えている。

【佐々木 康行 委員】

民族芸能団体が県内でどれくらいあるかわからないが、住田町だけで芸能団体に属しているのが13団体で、属していない団体もすべて含めると約50団体ある。現在、新型コロナウイルス感染症、高齢化の進行の影響もあり、活動、練習ができない状況にある。町としても、若い人が目を向けられるように郷土芸能祭りや夏祭りを開催しているが、現状は変わらない。

内陸の方では鬼剣舞で、全国大会で優勝している例もあり、そういった経験ができれば若い人たちももっと頑張りたいと思うはずであるが、住田町ではやる人、指導する人が仕事を兼務しており、やりきれないのが現状である。

VRを活用するのはどうかと考えており、郷土芸能のゲーム化や、モーションキャプチャーの体感システム構築などを、県立大学等と共同開発して、芸能の形を少しでも残しつつ、若い人が興味を惹きやすいように、うまく組み合わせる必要があると考えている。

映像資料に残すといった方法もあるが、ただ見て眺めるだけではなく、一緒になって体感していくことが次の世代の担い手の育成に繋がるきっかけになると考えており、そのような施策も考えて欲しい。

⇒ **【局長】**

震災直後は、郷土芸能で問題だったのは、道具がなくなったことで、復興交付金を活用して整備した。今問題なのは、指導する方とされる方が集まっての指導の機会がないことである。少子化の問題もあり、地域子ども達が集まらず、またコロナ禍で発表の機会もないため、民族芸能全体の活動が活性化していない。郷土芸能の伝承のみならず、子供たちに自分たちのコミュニティへの帰属意識をもってもらうために、地域協力として高齢の方に学校に来てもらい、指導してもらうことなどにも今後力を入れたいと思っている。

実際に活動されている方が、何に困っているのか、場所や道具なのか、それとも発表機会なのかということを知っていただければ、振興局としても動きやすいので、引き続き情報をいただきたい。

【河野 通洋 委員】

ぜひ、知りたいのは、観光客がどこの地域からどれくらい来て、どこに宿泊して、どのくらいお金を消費しているかということである。それを知ることができれば、課題が明確になってくる。

年明け、Go Toキャンペーンが始まると思うが、この沿岸地域として、どこに、どのような施策を打って集客するのか、また予算は何か確保されているのかを聞きたい。仙台空港のターミナルや仙台駅の広告・看板スペースは空いている。西日本や関西からどのようにやって観光客を引っ張ってくるのか。関西にはたくさん歴史遺産があるので、東北の売り出し方として、歴史遺産を活用するのは厳しいものがあるが、宮城県と連携してでもいいので、商品を作るとか、PRポスターを作るなどが必要ではないだろうか。

海外の状況を見るとインバウンドは難しいが、国内客、特に県内だけでなく県外からの誘客戦略を教えていただきたい。

⇒ **【産業振興室長】**

観光関係のデータ分析は、岩手県商工労働観光部観光・プロモーション室の方で観光客の入込数や消費関係等のデータを収集して、HP等で公表している。

三陸沿岸道路が、まもなく全線開通して人の流れも変わってくるので、三陸DMOセンターでも、情報を取る事も検討していると聞いている。

どのようにターゲットを絞って、三陸に観光客を呼んでくるかについては、岩手県には、花巻空港があるが、沿岸地域に限って言えば、仙台空港も大きな入り口になると考えている。仙台空港を利用する大都市圏（名古屋・大阪など）の方に対して、東日本大震災津波伝承施設を含む観光施設や、潮風トレイル、三陸ジオパークなどの観光資源を活用し、宮城県気仙地域と連携しながら、沿岸地域に観光客を誘導していきたいと考えている。

⇒ **【局長】**

県庁では個人が特定されない形で大規模データを分析するツールを導入している。その分析によると沿岸地域は高齢者及び内陸からの誘客が多かったが、コロナ禍で現在は途絶えつつある。

NHKの朝ドラで気仙沼市が注目され、宮城県でも集客に力をいれたが、ちょうどコロナとぶつかってしまい、思うように誘客ができなかった。このリベンジを宮城県と連携して行い、誘客につなげたい。仙台空港から気仙沼に来て、東日本大震災津波伝承館、それから三陸を繋げて、沿岸地域200キロをぐるっと回るルートを一エージェントと協力して作ることを、今年から行っている。

また、もう一つの案として、縄文遺跡の世界遺産登録を活用したい。北海道・胆振にも縄文遺跡があり、青森、一戸、そしてルートの最後に沿岸に誘客したいと考えている。三陸では鍾乳洞もあるので、自然目当ての方を対象としたルートとしたい。三陸では、高齢の客層が多いというデータが出ているので、満足していただけるよう沿岸の魅力売り出していきたいと考えている。

⇒ **【河野 通洋 委員】**

今日の日経新聞にも旅行商品がいくつか掲載されていたが、四国・中国地方が多く、北海道、沖縄、東北が一つずつであり、東北は青森だけだった。東北が弱いと感じる。

広島尾道の交流した時、700万人交流人口がいると聞いたが、1人当たりの購入単価が700円で地域にお金あまり落ちておらず、交流人口だけでなく、地域にお金を落としていく仕組みも同時に考える必要があるということだった。商店街の活性化ばかりを考えており、宿泊施設が盲点になっていたということだった。

三陸もそうなる可能性があるし、観光客が宮城県に流れる可能性もある。また、三陸ではなく県内の花巻温泉に泊まるという事例も聞く。沿岸で1泊して、内陸で1泊するような施策を考えてほしい。沿岸は水産物がやはり強みなので、地域で連携して一人あたりの所得、収入が増えて豊かになれば、十分持続可能になるので、その施策を考えてほしい。

【椎屋 百代 委員】

もともと大分県出身で20年以上前に山田町に移住してきたが、観光協会にいた頃は観光客を誘致する為に、他の市町村や三陸鉄道などと連携し一緒にエージェントのところに訪問へ行ってPRを行い契約するという形で行っていたが、震災後は、そういった連携して一緒に行

うというのが弱いと感じている。

私も今、語り部事業をしているが、先週、新しいエージェントのツアーで中部からお客様にいらしていただいた。山田町の食を体験していただきながら、震災語り部を経験していただく「つまみ食いツアー」というもので、昨年エージェント訪問の際に契約を結んだもの。新しいエージェントと契約するには、とても時間がかかることを実感している。三陸沿岸どこに行ってもいいので、まず三陸が一体にならないと観光は難しいと感じているので、観光業者や三陸鉄道と一緒にエージェントを訪問して契約を取ってくることに力をいければ、全体として潤うと思うのでよろしくお願いしたい。

【赤坂 広太 委員】

資料3-1の3ページ「スポーツを活用した沿岸地域の活性化」の中に潮風トレイルを入れられないか。潮風トレイルもスポーツとして成り立っているし、交流人口の拡大といった観点からも、良いのではないかと考えている。

⇒ 【特命参事兼企画推進課長】

御指摘いただいたとおり、野球・ラグビー・サッカーだけでなく、潮風トレイルや三陸ジオパークなど幅広く体を動かす体験そのものをこの地域で味わっていただくというところまで定義を拡げて、スポーツを活用したという文言にしている。地域資源として記載した中には、三陸ジオパーク、潮風トレイルと連携して、地域にあるアクティビティを通じて、活性化できるような資源を掘り起こそうという趣旨での事業実施を考えている。

今年度の事業では、スキューバダイビングと海中での写真撮影を組み合わせるといように、体験を組み合わせることで、効果を副次的に上げていきたいと思っている。

三陸には、マラソン、自転車を含めた様々なスポーツの体験の素材があるので、地域にあるものと連携して取り組みを進めていきたい。

【山元 一輝 委員】

資料3-1の4ページに「地域の建設企業の担い手確保」と計画されているが、ここ数年、深刻に感じている。各企業のPRの得意・不得意もあるが、建設業に若者が入ってこない。高校で見ると、土木建築系の学科は釜石・大船渡地域になく、宮古商工高校の建築設備科のみとなっているが、その宮古商工高校でも現在の3年生が卒業したら0という状況であり、募集も停止している。沿岸地域の中高校生が受験する際に、土木建築系という選択肢がなくなっているので、中高校生を対象とした企業見学会を是非積極的に行ってほしい。

私たちが各中学、高校を回って企業紹介をするというような活動はできておらず、県から後押しをしていただければ大変助かる。同じように思っている会社は結構あると思うので、建設業協会を利用してもらい、PRできる場を提供していただければ非常に助かる。業界としてかなり大きな問題になってくると思うので、支援をよろしくお願いしたい。

⇒ **【土木部長】**

我々も大変危機感を感じている。建設企業では、全体的に高齢化が進行してきている。建設企業には、除雪や緊急の災害対応等のほか、地域活動に協力をいただいております。地域にとって建設企業はなくてはならない存在だと考えている。

今年、学生の意識調査のアンケートを行ったが、どうしても建設業のイメージがきつというものがある。今の現場は昔に比べてしっかりしている現場がほとんどであるので、建設業界に若手が入社するようにアピールする場を作っていきたいと考えているので協力をお願いします。

⇒ **【局長】**

担い手確保は、建設業だけでなく、水産加工業等にも共通した課題である。一番の原因は高校生に加え、親が企業の名前を知らないということが挙げられる。高校生の進路選択には親も大きな影響を持っているので、高校生及びその親に地元の企業、優秀な企業を見てもらうという取組をしている。やはり覚えてもらうのが大前提であり、引き続き、御協力をお願いしたい。

【橋本 美紀 委員】

高校生は情報量が豊富なので、私達の考えられないようなことを、実は発想している可能性が大きい。高校生の意見を聞くために会議と一緒に参加してもらうことも必要だと感じている。

伝承の件だが、今統合している学校がたくさんあり、学校ごとに神楽とか舞があり、どちらを伝承しようかということがあり、閉校する学校が空くので、その利活用ということが問題になっている。伝承に関しても、伝承する方が高齢になっているが、異年齢の方たちと接する子供たちもいきいきとしている。宮古は年に一度、文化会館で発表する場があり、そのために練習もするので、発表する場が必要であると思う。

また、先ほど担い手不足の話もあったが、私はあまり心配をしていない。実際の活動を見ると感動するようであり、知る・触れる・体験することが大切である。最近、岩手県内に2人刀匠がいることを知り拝見させていただいたが感動した。実際に見学してみてもまだ知らないこともたくさんあると思う、子供達に知らせること、知ってもらうことが大事だと思った。

岩手は、山もあり、海もあり、自給自足ができる県だと思っている。水産物は採れなくなっているが、食べられる昆虫やジビエなど、別な方向に目を向けて産業として進めればいいのではないかと考えている。

沿岸地区は海がすぐ目の先にあるので、海に目を向け、産業と結び付け進めたらいいのではと思っている。宮古水産高校の生徒もだいぶ前からアカモクに着目しており、若い子の力も信じて、取り入れてみてはと思っている。

企業については、宮古市は奨学金が手厚く、宮古市に帰ってきたら奨学金の返済を免除するという制度もある。企業が本当に若者を欲しいのであれば、大学の学費を援助して戻ってきてもらう方法もあるのではないかと思います。

満月の日のカキは美味しいと言われており、特別なものを商品化するのもあるのではないか。私が旅行に行くとして、望むものは美味しい食べ物であるため、今までと違う視点で、商品開発することも必要だと思う。

【佐々木 淳子 委員】

資料3-1の6ページの漁業の担い手の確保、育成について、漁業の担い手を全国から募集して、集まってきているが途中で断念される方がほとんどである。県や市も一生懸命取り組んでいるが、集まってくれた青年達を地元で根付かせるには、皆が一丸となって協力しなければ難しいと感じている。

⇒ 【局長】

地域の中に新しく外から入ってくるため、それまでの地縁になかなか入れないなど、難しいこともあると聞いている。水産業だけでなく農業でも同様の問題がある。せっかく来ていただいたからには、できるだけ一人一人に寄り添ってサポートをしたいと思っているので、困ったことがあれば早めに知らせて欲しい。

⇒ 【水産部長】

以前から、新規漁業就業者が途中で辞めてしまうことがあり、基礎的な事を学んでいただくとともに、地域の人達と交流の場を深めていただくために、水産アカデミーを開講した。

漁業で立ち立つと、船や漁具などをそろえるなど資材が必要になってくる。負担を減らすために、地域で使わなくなったものを循環していく仕組みを作っていきたいと考えている。今後も漁協と連携しながら、人が入りやすい仕組みを作っていきたいので引き続きよろしく願います。

【内金崎 加代子 委員】

飲食店を営業していて、サーモンが出回っていないと感じている。メニュー開発とかギフト用にするなど工夫できるので、出回ってくれば良いと思っている。

スポーツに関しては、大槌町は、バスケットコート、野球場、テニスコート、サッカー場が完成し、かなり充実してきたように感じる。ラグビー場も鶴住居にあるので、スポーツの大会を誘致すると、各地から人が集まり、宿泊の利用が増えるのではと思っている。

また、潮風トレイルであるが、あまり浸透していないように感じる。トレッキング自体これまでになく文化なので、それを浸透させるために工夫が必要ではないか。沿岸には、生で自然を見て感じられる付加価値があるので、様々な情報発信をして、根付くようにすべきだと思う。

男性の高齢者が自宅外に出ない問題に関しては、大槌町では、町民が全国大会で準優勝し、現在、健康マージャンが流行っており、男性の方が自宅外に出るようになってきている。他の地域では大会出場などを支援している例もあり、遊びに思われるかもしれないが、手・頭のリハビリに加えて、コミュニケーションが取れるので、とても良い試みだと思っている。

⇒ 【局長】

高齢者が活躍できる場、楽しみを見つけられる場をどうやって作っていくか、選択肢が多い方が良いと思う。目に見える形でお知らせしていきたいと考えているので、社会福祉協議会や役場とも相談していきたい。

【佐藤 智子 委員】

相談に来る方で特に精神障害者の方が、自分の病気について職場に話さないということが多く、本人たちの考えがあって話さないところもあると思うが、受け入れ体制を柔軟にしていればと思っている。

また、私は第2層生活支援コーディネーターとして大船渡市日頃市町で活動をしているが、サルの被害が大変多い。サルに来られないように、柿の木を切ってほしいという指導もあるようだが、長年大事にしてきた木が無くなることを残念に思っている高齢者がいる。高齢者が元気でいきいきと過ごすためにも、柿の活用など、木を切らずにすむように、知恵を出していただきたい。ただ、補助金と言われると皆さん引っ込んでしまうため。講習会を開くなど、何か違う助けがあると良いと思っている。

また、日頃市町(大船渡市)にはゴトランド地層や鬼丸砕石場というものがある。今は、看板だけだが、そういった地域資源も、砕石発掘ツアーを行うなど観光資源として活用をお願いしたい。

⇒ 【局長】

三陸には、観光資源としてジオサイトがあり、地域の様々な資源をストーリーでつなげる作業が必要であり、気仙広域連合と一緒に、地元の魅力をアピールできるよう検討したい。

【河野 通洋 委員】

陸前高田市で民間と連携してユニバーサル就労支援センターを立ち上げて2年になる。その施設は、いわゆるひきこもりの子達の社会へ出るためのプラットフォームの役割を担うもので、陸前高田市だけで年間100人以上の相談がある。これは氷山の一角にすぎないと考えており、今回は陸前高田市民生委員のネットワークを使って把握したが、かなりの数の引きこもりがいるようである。引きこもりは若い方だけでなく50代、60代の方もおり、親の年金で生活しているようであるが、親が亡くなった場合に生活に困るのではと思っている。

各市町村同じような課題を抱えていると思うが、社会の最低限の器を作る必要が地域全体であると思う。農業、漁業など、全てをAIに取って変われるわけではないので、そういった施策も考えてほしい。

⇒ 【局長】

御提案感謝申し上げます。沿岸広域で各市町村等と意見交換しながら今後については考えていきたい。

⇒ 【河野 通洋 委員】

社会福祉協議会に情報提供をしたが、社会福祉協議会や市の保健課も現状を把握して

いないようである。

引きこもりの方がいる御家庭は、親、本人も出ていきたがらないので把握しづらいが、これを解決しないと大きな問題になると思う。

⇒【保健福祉環境部長】

岩手県や釜石保健所では、過去に引きこもりの方の調査をしたことがあるが、実態が分からないところもある。引きこもりの方の就労支援に関しては、障害福祉サービスの事業所で、就労支援を行っているほか、ハローワークでも、障がいをもった方を対象に就業支援をしている。

ただ、それは本人が外に出てくるという意欲を持っているのが大前提であるため、外に出たがらない人は、あてはまらない。

実際の事例として、両親も高齢者で年金だけでは厳しいので、生活保護を受給している方の例をこちらでも把握している。

⇒【河野 通洋 委員】

沿岸地域で、各家庭で抱えている状況は異なると思うが、お父さん、お母さんが亡くなっている場合があり、いきなり孫という家族形態もある。そのような場合、年金で孫と将来の生活設計を考えていく際にどうしても厳しい状況となる。

県の方でもデータをとられたということなので、その調査結果を共有していただき、その後の対策についても、伺ってみたい。

⇒【局長】

引き続き御相談させていただくのでよろしく願います。

(4) その他

【特命参事兼企画推進課長】

県民計画の沿岸広域振興圏地域振興プランの最終年度が令和4年度であり、令和5年度以降の新しい計画を策定していく必要がある。その際には、委員の皆様から御意見をいただき、より実効性のあるものにしたいと考えているので、令和4年度も引き続きよろしく願います。

(5) まとめ

【局長】

本日は、長時間様々な御意見をいただき感謝申し上げます。

行政は独りよがりな考え方をしてしまいがちなので、引き続き皆様に地域の課題等御教示いただけると幸いです。

今後ともよろしく願い申し上げます。